

方言語彙研究について

鎌田良二

方言語彙の研究は一地点について多くの語彙を収集し整理し考察する方法と、広く全国にわたって一つの語彙についての相を観察する方法とがある。

前者は殆んど手当り次第に採録していくのであり、後者は方言量の多いと思われる語について調査するものである。即ち、方言採集手帳とか調査簿によって調べるのである。

前者はそれを整理し考察することによってその土地の音韻上の傾向も知れようし、意味分類することなどによって生活基本語彙の傾向も考えられるだろう。後者の整理と考察によっては意味変化、形態変化の傾向命名の分化を知ることが出来る。そして、これは「カタツムリ」とか「メダカ」とか、或いは「ナメクジ」とかのように全国的にどこにでもあるものについて、即ち、北海道でも九州でも、農村、漁村でも都市でもその実体そのものがあるというもの、そして、それは意味変化は殆んど考えられずただ語の形態変化のみをみる場合と、「明後日」の次を何というか、「シアサツテ」というか「ヤナアサツテ」というかどうか、というような二つの中何れか、という、或る語の有り無しを調べるものや、「踵」を「カカト」というか「カガト」というか、また、それから変化した形か、というような音韻上の問題をみるもの、

また、「痛い」の意を、場所、程度、その他の様態の違いによって異なる語を使うかどうか、というようなことを調べる。そして、それらを総合して方言採集手帳などでは意味、形態上の変化の多いと思われるものを採って記されている。

さて、長尾勇氏は最近「蛞蝓考」(国語学三二輯)として現在の「ナメクジ」の語の全国的な形態の変化と、史的な立場から、新撰字鏡、類聚名義抄とか、その他、多くの古辞書によってその語形の相違を示しておられる。

いまこのような方法を、いわば通時的、共時的の両面から、多くの語彙について調査することは出来ないものだろうか。

ところが岡山県なら岡山県の奈良時代の全語彙を記した方言集とか平安時代の岡山県の方言集とかいったものはない。

ただ古い文献の中から或る僅かの語彙については知り得ても、例えば、二百年きざみに岡山県の全語彙をあげた方言集というものはない岡山県に限らず、富山県でも、山口県でも同じだが、このようなものが各県にあればいろいろと知り得ることも多いだろうが、残念ながらそれはない。

「浜藪」などのあたりになればある地方もあるが、それ以上、古い

ものはない。

そこで結局「物類称呼」とか、「俚言集覽」といった江戸期のものから明治以降のものを集め、その史の変遷のあとをたどることになる。だから約二百年間の方言彙集変遷過程をみることになる。

明治以降でも、新聞、ラジオの影響などによって、相当、方言彙集の上に變化して来ていることも考えられるが、ここで、さきの全国的な横の調査方法をもこれにからませて、使えば、「物類称呼」に、近畿と記されているものが、今日、中国地方にもどれほど入って来ているか、あるいはその間に形を変えているか、などの調査をしてみてもうだろう。

さらに、明治以降の方言集で岡山県方言集の語がどれほど兵庫県でも使うか、そして、その間に語形、意味用法の變化があるかどうか、そういうことについて調べてみてはどうだろう。

即ち、今日、岡山県方言彙集といわれているものが、語源的にも岡山県にだけしかない語彙か、命名の分化、また、語形變化、意味變化して隣の兵庫県でも用いられているかどうか、そして、その岡山県のみの語は江戸期あたりからあったのか、それとももつと新しいのか、というようなこと。

そこで、この調査を行うためには、まず、江戸期以降、明治、大正、昭和の方言彙集を集めなければならぬ。集めることは簡単なことのようにもあるが、実際には出版部数が少いか、いろいろの不便のため、今、われわれがいつでも手に入れることの出来る東条操先生の「全国方言辞典」を使用する。この辞典は、全国約五百部の方言集と約三百五十部の地誌を中心とした方言文献から整理して集められたもので

あるから、この整理された全国の方言集から、例えば兵庫県の方彙集をしらべるならばその近隣の各県のものをぬき出し、それとの關係をしらべる。「物類称呼」「俚言集覽」その他の資料との關係もみる。

變化過程をみるために次のような符号でそれを区別してみる。

服部四郎博士の「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について（言語研究第二六・二七号）と「沖縄方言の言語年代学的研究」（民族学研究一九卷二号）に示された方法を少し変えたようなものであるが、語の形態變化、意味變化の統計としてはこれによるのが近隣他県との關係を調べるのには面白いと思う。

はじめに「全国方言辞典」の中から關係語をぬき出してそれによって、語彙調査表をつくる。例えば兵庫県佐用郡の調査であれば、方言辞典の中から兵庫県關係の語をぬき出す。それに佐用郡は岡山県との県境にあるから岡山県の東部の語彙、そして、佐用郡はまた鳥取県と大阪、神戸との交通の要地にもなっているし鳥取県にも近いから鳥取県東南部の語彙をぬき出す、また、近畿とか中国とか記されているものもぬき出す。

このようにしてとり出してみると約千六百語ほど出るようである。

そしてその語と臨地調査によって被調査者から聞き取った語との比較において次の符号をつける。

十 方言辞典と全く同じでそのまま用いているもの。動詞、形容詞は語幹のみを問題にする。

一 被調査者が当地に於ては用いていないと言ったもの。または、当地の方言が方言辞典の語と語源的に異なる場合。

十 方言辞典の語を基として、それに接頭辞または接尾辞などが

づいて現在の方言として用いられているもの、及び、音韻変化して用いられているもの。

×
+とは反対に現在使っているものの方が基の形と考えられるもの。方言辞典の方に接頭・接尾辞がついているが当地で現在使っているものはそれがついていないとか、音韻変化の方向が現在用いているものの方が古い形で方言辞典の方がそれから変化した新しい形と思われるもの。

以上のようにあるが、それに例えれば+であることはおおよそ考えられるがなお疑問の余地がある場合は⊕のようにするとか、同様に×であることはほぼ確かだがなお疑問の余地がある場合には⊗のようにする。

また、+であつても意味領域にいくらかずれがある場合は⊕にする。+か×かわからない場合は○にするなど。

実は、以上の方法で筆者はさきに甲南女子短期大学学生と共同で兵庫県佐用郡と宍粟郡を二年間にわたって調査した。共同と言っても学生が主であつて、佐用郡については吉田康子氏が主となり豊田保栄氏、山元久代氏が協力、宍粟郡は村上詢子氏が主に片山栄子氏が協力して語彙調査した。

その結果は昭和三十三年度、三十四年度の卒業研究報告として詳しく報告されている。

+の数、-の数、×の数を、基の方言辞典の岡山県語彙でどれだけの数が佐用郡において+になっているか、+になっているか、その百分率、そして意味分類した場合、どういふ語に+が多いか、-が多いか等、なお、この方法について注意しなければならぬことを二三あ

げておく。

語彙調査の場合はいつもそうであるが、まず意味上の相違があるかどうかである。なるべく簡単な文の形にしてたしかめることが大切である。

被調査者の選定はむずかしい、だから一地点について年令、性別、職業などの違いによって幾人かの人について調べるようにする。

一の場合は特に、「それではこういう意味のことを当地は何といふか」というような質問によつて別の語を求めておく、そしてその新しい語を次の地点で参考にたずねてみてよい。

+か×かをきめることは簡単なものもあるが、実際にはかなり面倒なものも多い。古語の知識も必要であるし、音韻上の知識も必要であることは言うまでもない。

また、「全国方言辞典」の「編纂の趣旨のところにも次のようなことが書かれている。

音韻事象についても、独立に音韻論が成さるべきものであつて、語彙辞典の記述するところではないが、国語音韻論の資料としては、音韻転化の例としてかなり多くのものを取出すことができるであらう。それらを整理することによつて、転化の方向について或る程度の法則を立て得る可能性もある。例えばコーバイモ・コーバイモ（馬鈴薯）は直接の転音でなく、もとコウバイモからの音韻分化であり、フーズ・フーズバナ（紫雲英）はホーズバナからの転化であらうという推定が法則性を根拠としてなされたかと思ふ。

+とか×は勿論、仮りにこうしておいてあとでなるべくはっきりさ

せなければならぬ。

次に、兵庫県と中国地方、即ち、岡山、鳥取両県に接する地方の方言語彙調査の際の調査語彙の一部をあげておく。

番号をつけたのは、幾地点かをまわる際に一回毎に表をつくるのは大変だから表は一つにしておいて番号によって手もとのひかえに々とか×などを書き入れる。

また、関連してたずねた方がよいような語はなるべくそうするため、その番号をまとめてひかえておく。

表の中で「オ」は岡山県、「ト」は兵庫県、「ナ」は鳥取県の意である。「ヒ但馬」は兵庫県全般とまた但馬というのでなく、兵庫県の但馬である。「中」は中国地方、「神」は神戸市である。又、地名のあとに(物)とあるのは「物類称呼」にある語である。その他同じような()の中は出典である。

なお、この小論の一部は筆者がさきに、「三重県方言第八号」に発表した「方言語彙調査の一試案」の補正になっていることをおことわりしておく。

近畿、中国境界線調査語彙の一部

- 一 あいたけ(藍茸) オ 初茸
- 二 あいのかぜ ト 南西風、南東風、南風
- 三 あえくる ト 愚弄する、嘲弄する
- 四 あえもの オ 乾魚、塩魚の総称
- 五 あえる(古語あゆ)ヒ、ト 果実などの熟して落ちること
- 六 あえる ヒ、ト もてあそぶ、からかう、「猫をアエル」

- 七 おおぎた(青北) キ、(物)
 - 八 おおぐも(古語) オ市
 - 九 おおち(おおちかぜ) 淡路、オ
 - 一〇 おおばな キ、(物)
 - 一一 おおびぎ オ
 - 一二 あかい キ以西
 - 一三 あがい オ
 - 一四 あがく オ、淡路
 - 一五 あかし キ
 - 一六 あかはら ヒ
 - 一七 あがみ(あかうお) キ、(物)
 - 一八 あかん キ
 - 一九 あかたれ ヒ佐用
 - 二〇 あき キ
 - 二一 あくち オ
 - 二二 あげ ト
 - 二三 あこ ト
 - 二四 あぎ ヒ揖保
 - 二五 あさつてり ヒ赤穂(物)
 - 二六 あさどり オ、ト
 - 二七 あさま ヒ、中
 - 二八 あさまち ヒ
 - 二九 あさまり ト
 - 三〇 あしあらい(足洗) オ
- 八月の風(畿内及び中国の船人)
 青空
 物の動きによって起る微風、
 あおり風
 つゆくさ
 あまがえる
 明るい
 あのようにな
 もがく(オ)、寝相悪く動きま
 わること(談)
 細い薪
 いもり
 あなた
 だめだ、いけない
 弱虫
 とりいれ、収穫「大豆のアキ
 はもうすんだか」
 口の端などの切れる病、口唇
 炎
 海に対して陸
 乳児、あかんぼ
 はくる
 あさつて、明後日
 秋胡顔子、ぐみ
 朝、朝方
 麻畑
 朝
 田植後の骨休め

三	あじうり	オ、西国(物)	まくわ瓜
三	あじこい	ヒ但馬	綺麗、うつくしい
三	あしつき	オ	踏台
三	あじない	キ	無味、まずい
三	あじやら	キ(物)	たわむれ、いいかげん、かり そめ、じょうだん
三	あじる	ト	眠っていて身体を動かすもが く
三	あじる	中	漁場
三	あすてり	ヒ赤穂(物)	あす、明日
三	あずる	オ、ト、ヒ	眠っていて床の上で動きまわ る(オ、ト、ヒ)もがく(オ、ト、ヒ)
三	あぜいと	西国(物)	桜みちをわくる糸、かざり
三	あぜたけ	関西(物)	機の緯をかける竹
三	あぜまめ	オ	大豆、枝豆
三	あせる	オ	舌などの荒れること、「舌のア セルような熱いお茶」
三	あた「接頭」	神	不快の意を表す「アタめんど う」「アタしんどい」
三	あだ	オ、西国(物)	外、そと
三	あだ	ヒ但馬	容易、主に打消に使う「アグじ やない」
三	あだ	ヒ但馬	落す
三	あだかす	ヒ、ト、オ	落ちる
三	あだける	オ邑久	頭蓋、あたま
三	あたまのさら	オ	意趣返し
三	あたりがけ	オ	小作
三	あたりさく	オ邑久	田などを借りること、小作す る
三	あたる	中	落ちる、木の実などのばらば ら落ちる
三	あだれる	ト	私
三	あだん		
三	あつかう	西国(物)、オ	いじる、弄ぶ(西)、いたわる、 養生する(尤)
三	あつかましい	ヒ佐用、オ	うるさい、やかましい「子供 がさわいでアツカマシイ」
三	あつちやこつちやキ、ト	オ、邑久	あべこべ、反対
三	あてる	オ、ト	田畑を貸す、小作させる
三	あと	ヒ、中	畦をきった水口、田水の落し 口
三	あととり	オ	後妻
三	あとくち	中	田の水の落し口
三	あとさん	オ	神仏或いは僧など
三	あとづけぞーり	関西(物)	江戸にていうごんずわらじ
三	あとめ	ヒ、佐用	後妻
三	あなじ	近畿以西	主に西北風、所によつては西 南風など
三	あなげ	畿内、中国 の船人(物)	西北風
三	あば	オ和氣	伯叔母
三	あばかす	ト	だます、欺く
三	あばかん	ト	堪えられない
三	あばける	オ	水などはけること、「大雨 で水がアバケン」
三	あぶた	ヒ、但馬、ト	あぐら、胡坐
三	あぶらしいし	ヒ播州 (重訂本草)	石炭
三	あぶらまぜ	畿内、中国 の船人(物)	初夏の頃に南々西より吹く中 風
三	あほーまち	オ邑久	四手網
三	あまいも	オ邑久	さつまいも
三	あまがき	オ	いちじく
三	あまこ	オ	ありまき、あぶらむし
三	あまた	ト	物置の用をする二階、天井裏

九	あまぢや	オ、邑久	唾、つばき	二〇三	あんのうち	キ(日葡辞書)	考えたとおりにあんのじょう
〇	久あまのじやく	オ	斑猫の幼虫	二〇四	いーれ	ト	結納
一	あまばおり	中(物)	雨合羽	二〇五	いおん	ヒ印南	附木、つけぎ
二	あまんじやく	オ、ト	蟻じごく	二〇六	いかい	キ	たこ、尻
三	あまる (口語あもる)	中	雷の落ちる	二〇七	いかに	キ(物)、オ	大きい、大変な(キ)たくさん (オ)
四	あまる	オ	腐敗する	二〇八	いかし	キ(物)	糞、ざる
五	あむし	ヒ佐用	痘痕、あばた	二〇九	いかのぼり	ヒ但馬	糞、しいな
六	あめがた	ト	鮎	二一〇	いがむ	ヒ但馬、ト	尻、たこ
七	あめだか	西国(物)	水馬、あめんぼ	二一一	いかめい	ト	動物が争つてうなる
八	あめりかいも	オ	さつまいも	二一二	いがる	ヒ、ト	うらやましい
九	あも	関西(物)	餅	二一三	いぎ	中	叫ぶ、泣き叫ぶ
〇	あやぎ	中(浮世鏡)	薪にする雑木、小枝、柴	二一四	いぎ	キ(日葡辞書)とけ	くものす
一	あやす	ヒ佐用、オ、 ト、気高	落す、木の実などをたたいて 落す(佐)、失う、遺失する (オ)、膿を出す(ト)	二一五	いきざし	ヒ但馬	横腹の上部、肺の末端あたり
二	あらいなわ	ト	さわいも	二一六	いきなり	オ	だらしないこと、ふしだら
三	あらいも	ト	たわし	二一七	いきのー	オ	すぐに、直後「来たイキノー から文句を言っている」
四	あらし	オ	若い元氣な雇人、元氣盛りの 作男	二一八	いきり	ト、オ	湯氣
五	あらしこ	オ	五月の南風	二一九	いきる	オ、中	意氣込む、力む(オ)、調子に のる、はしゃぐ、さわく(中)
六	あらはえ	織内中国の 船人(物)	有る限り、ありつたけ	二二〇	いぐいも	ト	里芋
七	ありこまち	ヒ佐用、ト	あれ程	二二一	いぐれ	オ邑久	土塊
八	あれしこ	西国(物)	ぐあい、調子	二二二	いけ	ヒ佐用	井戸
九	あわい	オ	愚人、おろか者	二二三	いげ(つるいげ)	ヒ飾磨	うみ、硯
一〇	あんごー	中(浮世鏡)	ぐあいよく、都合よく	二二四	いげちない	ト	なさけない
一一	あんじょー	キ、オ		二二五	いげつない		ひどい、むごい、かわいそう

二六	いこす	キ	火をおこす
二七	いざる	オ	松柏などが横に這う
二八	いしい	キ(物)	美味しい
二九	いじかる	キ(物)	すわる
三〇	いしき	オ	しり、臀部
三一	いしな	キ	石、小石
三二	いしなご (いしなんご)	中(物)	おてだま
三三	いじましい	神、オ	うるさい、じれったい、気持ち がわるい
三四	いしやだおし	オ	げんのしょうこ
三五	いしやらい	中(物)	細螺、きしやご
三六	いじよー	ト	しじゅう、常に
三七	いじる	オ	子供がせびる、ねだる
三八	いじる	オ	膝ですりよる
三九	いせごい	オ	鱈、ぼら
四〇	いそめばる	西国(物)	藻魚
四一	いたしい	中	苦しい、むずかしい、困難
四二	いたじーら	オ	しいなの中の屑
四三	いたたく	キ(日葡辞書)	頭に載せる
四四	いたば	ト気高	料理人
四五	いためる	中	いじめる、打擲する
四六	いたわしい	オ	弱々しい、心細い「あの組の 細さではイタワシイ」
四七	いちきり	ト	初から終りまで、始終「イチ キリまがわるい」
四八	いちびる	神	調子づいて騒ぐ、調子にのる
四九	いちま	キ	市松人形、人形
五〇	いちらく	ト	ひとます
五一	いちりだま	ト	飴玉、てっぼうだま
五二	いっけうち	オ	親類、親族
五三	いっける	ヒ	結いっける
五四	いっこに	中	共に、いっしょに
五五	いっしく	オ	残りなく、ひとそろい
五六	いっそー	キ(日葡辞書)	通知、伝言「イツソーを持つ」
五七	いっちょーらい	ト	晴
五八	いで	ヒ、中、オ	溝、用水路(ヒ、中)井堰、せ き(オ)
五九	いてる	神	凍る、氷結する
六〇	いと(いとさん)	ヒ、キ	娘、お嬢さん
六一	いと	ヒ但馬、ト	川辺の物洗場
六二	いど	オ	尻
六三	いとがね	オ	針金
六四	いとしい	ト	かわいそう
六五	いととり	オ	綾取り
六六	いどの	オ邑久	便所、肥壺
六七	いなき	ヒ但馬、ト	稲架
六八	いなぐる	オ	稲村
六九	いなげな	中	変な、つまらない「イナゲナ 天気「イナグナ物ですがさし あげます」
七〇	いなす	神	逃がす
七一	いなひき	オ邑久	稲抜き
七二	いぬ	ヒ	行く
七三	いぬる	キ、中	帰る、去る
七四	いね	神	寝相、寝姿

語彙調査表としては次の項目を必要とする。

①番号(調査語彙番号)

②現地に於て用いられている語形(アクセント付)

③用例(短文の形にして)

④符号(+ - × +)

⑤関連語彙の番号

右の①と⑤は調査に行く前に表の中に記入しておいて調査時間を節約する。

「甲南女子短期大学論叢」

第一号

中国最古の「天」の文字……………	艸野忠次
「くせものがたり」の初稿本……………	三沢諄治郎
源氏物語の内部構造……………	岩瀬法雲
播州赤穂方言語法……………	鎌田良二

第二号

大学章句疏証……………	艸野忠次
大矢博士「隋唐音図」の再検……………	三沢諄治郎
—その等韻図的性格—	
「明暗」論……………	岩瀬法雲
尊敬表現としての「て」「に」……………	鎌田良二
万葉集解釈の基盤……………	吉永登
—二つの歌の解釈を通して—	

第三号

宜長の源氏物語論……………	岩瀬法雲
和歌史上に於ける芭蕉の位置序論……………	加藤順三
「五音五位之次第」の考察……………	三沢諄治郎
「誤表現と誤解」……………	山内潤三
—言語の伝達機能に関して—	
阪神間方言語法……………	鎌田良二
中国最古の天文曆法……………	艸野忠次

第四号

「五音歌」の考察……………	三沢諄治郎
中国の古典における二十八宿説……………	艸野忠次
源氏物語のことば遣い……………	岩瀬法雲
兵庫県方言研究の概観……………	鎌田良二
—一つの反省として—	